

15歳のきみへ

福島県立橋高等学校 第42代校長 青山 修身

かつて、ルイ・アラゴンという詩人が、「教えるとは 希望を語ること 学ぶとは 誠実を胸に刻むこと」(大島博光訳『ストラスブル大学の詩』)と謳うたいました。ときあたかも第二次世界大戦りようげん、燎原りようげんの火のように欧州大陸に戦火広がるさなかでした。

希望とは、自己と自らの置かれた状況を把握するとともに、自らの資質や能力を自覚し、それを伸ばし、高めていこうとする中で、きみの精神が示す世界への方向性です。

ルイ・アラゴンが生きた時代、教師や学生が投獄されたり銃殺されたりする状況下、教え、学ぶことは、ともに希望を語り合うことにほかなりませんでした。

それは、ときを隔て、遙かヤマトタチバナの国の、ここ東北、ここ福島において、2011年3月11日14時46分以降、未曾有みぞうの困難な状況が続く今こそ同様ではないでしょうか。

このウェブサイトアクセスした15歳のきみにお願いしたいことがあります。

「3・11」後の世界、時代にあって、これまでもそうであったでしょうが、これからも日々学ぶことに、どうか努めて誠実であってください。

黒板に書かれた「hope」という単語を、先生の発音を追ってきみは復誦ふくじようします。そう強くはない、少し不揃いの声々が中学校の校舎の一角に流れます、「hope」と。それは、ひとの胸についに消えることのない、灯火ともしびのことです。

昼休みの教室で友だちと漠然と将来の自分たちの姿を想い描くとき、放課後の職員室で先生に進路に関する迷いや悩みを相談し、アドバイスに耳を傾けると、きみは、友だちや先生と、ともに希望を語り合っています。

教え、学ぶ場である学校は、誠実さを胸に刻みつつ、教える者も学ぶ者も、ともに希望を語り合う場なのです。

当校は、創立120年の長い歴史と揺るぎない伝統を誇り、かつ、「花タチバナ」の名を新たに冠して15年目を迎え、生徒は、自由な校風のもと、礼節をわきまえ、品格を重んじ、「自主、自

律、自立」を校是こうぜとする橋高生としてのアイデンティティーを胸にそれぞれの進路実現、自己実現に向けて、今の学校生活を精一杯送っています。

ひとにはそれぞれ異なる資質や能力があり、異なる状況の中で、それは、ときに行く先も見えず、つらく苦しいものかもしれませんが、ひとは、自らの資質や能力を何とか伸ばし、高め、少しでもより良い人生、価値ある人生を生きていこうとします。

希望を持つことは、生きていこうとすることです。

当校の教職員は、当校の全ての生徒に対して、誠実に受け止めるであろうとの心からの信頼しんしんを寄せ、一人ひとりに対して、日々真摯に希望を語りたと思っています。

そして、再びの真白きタチバナの花芽吹くきた、来る春に新たに高等学校の門をくぐるであろうきみにとっても、当校は、そのような場でありたい、あり続けようと考えています。

一人ひとりが、一つひとつの異なる希望を抱いています。他者の希望を肯定しつつ、それぞれが自らの希望を生きようとする、そこに「私たち」の希望は宿ります。

この世界は、荒涼としてはいても、たとえ無常ではあっても、一人の子どもが泥を拭いた故郷ふるさとの写真を手にも前へと歩き出す、復興・再生へと向かわんとする世界です。私たちは、この極限の困難に挑み、まなじりを決して静かに立ち上がります。

東日本大震災及び福島第一原子力発電所事故後の時代にあって、それぞれが、それぞれの立場でなし得ることを、なすべきことをなさなければなりません。きみは、よくよく勉学等に励み、進路実現、自己実現を果たしてください。今ここに生きて、在るということゆめゆめを努々粗末にせず、無駄にせず、どうか大切にしてください。

「3・11」後の新たな、より良い世界の創造に、その一員として参画していくであろう15歳の、きみよ、ともに希望を語り合う場の扉は、ここタチバナ香る地に開かれています。